

「1968年代」の残光 ― 〈68年5月〉の歴史化と抵抗

2008年5月14日@東京大学駒場 西山雄二 (UTCP)

文明は脂肪だ。「歴史」は挫折する、神は、神を欠落させたまま、もう私たちの疑い深い壁を飛び越えず、人間は人間の耳もとで唸り、「時」は道を間違え、核分裂は進行中だ。それから何が？ ―ルネ・シャール

〈発表要旨〉

1968年5月から40年——世界史的な視野を踏まえて、5月の出来事とはいったい何だったのか。また、フランスにおいて、68年5月の出来事はどのような集合的記憶を形成してきたのだろうか。そして、グローバル資本主義が世界を席卷する現在、68年5月の意味をどのように考えればよいのだろうか。

〈構成〉

- | | |
|--------------|-----------------------------|
| 1. 六八年五月の出来事 | 3. 六八年五月40周年 |
| 2. 五月の解釈と歴史化 | 4. 六八年五月を知らない私がパリの路上で経験したこと |

1. 六八年五月の出来事

・1960年代の世界情勢

65年に北爆が開始されて泥沼化するヴェトナム戦争

第二次世界大戦後に構築された社会秩序に対する異議申し立て：

反戦運動と黒人公民権運動（アメリカ）、ヴェトナム戦争反対運動（西ドイツと日本）、フランコ独裁体制への反対（スペイン）、社会主義の抑圧体制への抗議（ポーランドとチェコ「プラハの春」）、権威主義的な政治体制への抵抗（ブラジルやメキシコ）……

・フランスの情勢：1962年、アルジェリア戦争終結。

①不正義に抗する市民運動 ②知識人の戦争 ③国家の暴力

フランス第五共和制はド・ゴール大統領の統率力（1958年-）のもとで政治・経済的な安定期に入る。

→六八年五月をとり巻く歴史的文脈：「1968年代」

資本主義の進展（高度経済成長と消費社会）、アメリカ帝国主義、第三世界主義、ド・ゴール主義への反発

〈五月革命の経過〉

3月22日：アナーキスト活動家ダニエル・コーン＝ベンディットを筆頭にソルボンヌ大学ナンテール分校の「怒れる若者たち」が動員を呼びかけ、管理タワーにある会議室を占拠 →「三月二二日運動」グループ

ダニエル・コーン＝ベンディット：「赤毛のダニー」

1933年にフランスに亡命してきたドイツ系ユダヤ人の家に生まれる。

「生まれでいうとフランス人、偶然にユダヤ人、ドイツ的なものに無頓着なドイツ人」

5月2日：反帝国主義デーと称された集会がナンテール大学で開催。

大学側は極右集団の暴力的介入を回避するために大学施設を閉鎖。

3日：全フランス学生連合（UNEF）の呼びかけに応じて、400名ほどの学生がソルボンヌ大学中庭で集会。大学の要請によって警察によるソルボンヌの閉鎖、学生を逮捕。

→ 一般の学生たちが「俺たちの仲間を釈放せよ」と叫び「自然発生的」にデモを開始。

「俺たちは小集団（グルピュスキュル）だ。」

10日：「バリケードの夜」：高校生、大学生、労働者たちからなる二万人のデモ。

学生側は活動家の追訴の中止、大学構内の警察の退去を要求。

発射される5,000発以上の催涙弾とガス弾、応戦する学生の火炎瓶、警官や機動隊員のデモ参加者に対する容赦ない暴行……「CRS=SS（機動隊＝ナチの親衛隊）」……380人ほどの負傷者、460名の逮捕者、180台もの自動車が破壊

11日：ゼネストの開始

フランス二大労組、共産党系の労働総同盟（CGT）とキリスト教系のフランス民主労働同盟（CFDT）が学生の運動に同調、二四時間ゼネスト指令。→24時間で終わらず、17日以後、ストはフランス全土で急速に拡大。ほぼすべての官公庁、郵便局、フランス電力・ガス、銀行、百貨店がストに。国鉄とパリ交通公社のストによって列車、地下鉄、バスが止まる。700-1000万人（労働人口の二人にひとり）がストに参加。

→ 自然発生的な要素を含む、第二次世界大戦後最大規模のゼネスト

13日の夕方：ソルボンヌ大学の占拠。

学校占拠や学生スト、異議申し立ての「壁の詩」、直接民主主義的な総会…。

15日：国立劇場オデオン座の占拠。→五月の文化革命的要素。「想像力が権力を奪取する」「壁は語る」

25日以降：政府の巻き返しと運動側の内部分裂。

パリのグルネル街の社会問題省の一室で政府関係者と労使の代表者と会談（グルネル協定）。

最低賃金の10パーセント引き上げ、週40時間労働制、組合活動の保証という妥協案。

30日：ド・ゴールのテレビ・ラジオ演説

国民議会の解散と総選挙の実施を宣言。「共産主義独裁からフランスを救え」との呼びかけ。

夕方、シャンゼリゼ大通りでド・ゴール派の大規模なデモ（50万人）→反 - 五月革命の流れが決定的に

6月12日：選挙期間中はフランス全域でいかなる示威行動をも禁ずるという閣議決定。

「三月二二日運動」、トロツキスト、アナーキストら極左小集団の解散命令。

6月下旬：総選挙→ド・ゴール派の圧勝、左翼のリーダー、マンデス・フランスの落選。

2. 五月の解釈と歴史化

五月の出来事という事実

＝第二次大戦後、西欧先進国で生じた唯一の全国規模での社会的叛乱

フランス史上最大のあらゆる階層の労働者によるゼネスト：アメリカ、ドイツ、日本など六〇年代の他の先進諸国と比べると、フランスにおいてのみ、支配的なイデオロギーへの知的拒絶と労働者の蜂起が共鳴して大衆運動が高揚

五月の出来事の多種多様な解釈：1970年、ベネトンとトゥシャールによる解釈の一覧表

① 極左や共産党が社会転覆を試みたとする陰謀説：ド・ゴール大統領

② 旧来の大学制度の硬直化と大学生人口の急増との矛盾による大学危機から五月が生じたという説

③ 権威的な父世代に対する若者の祝祭的な反抗だったという説

→個人主義的な無責任さの現われ：〈父〉の権威、つまり、フランス社会の伝統的規範という権威を失墜させ、若者たちは善悪の判断基準を失ってしまった。自由気ままな「ナルシス的個人主義」（ジル・リポヴェツキー）の気風が社会に蔓延。

④ 消費社会を批判する五月の運動は文明の危機だったとする説

→五月の倒錯的な結果：既成秩序の変革を試み、社会主義的な理想を掲げた「六八年世代」こそがフランス資本主義をさらに促進した。五月＝「新たなブルジョワ社会の揺籃」（レジス・ドブレ）

⑤ 支配や管理に抵抗する新しい社会闘争の誕生だったという説

⑥ 経済的な要因による従来型の階級闘争だったという説：フランス共産党

⑦ 硬直化したド・ゴール体制への政治的反発だったとする説

→五月の根本的な無力さ：社会の表面的な変化しかもたらさない「革命もどきの叛乱」。学生と労働者の「心理劇」（レイモン・アロン）にすぎず、政治的・経済的な観点から見て「五月には何も起こらなかった」。

〈出来事〉としての五月

⑧ 特定の要因ではなく、数々の偶然の連鎖によって五月の出来事が突発的に生じたとする説

「六八年五月の出来事は、いかなる通常の——あるいは規範的な——因果論からも解き放たれた純粋な出来事に属するものと言えるだろう。この出来事の歴史は一種の〈不安定と変動の増幅の連続〉にほかならない。六八年には、じつに多くの騒乱、思わせぶりな身振りや発言、そして愚かな行為や幻想といったものが出現したのだが、それはたいして重要ではない。重要なことは、六八年五月に、ある透視力が出現したということ、この現象である。つまり、ひとつの社会がそこに含まれている何か耐えがたいことを突如として見出し、さらにはそれとは別の可能性をも見出したということである。」（ドゥルーズ＋ガタリ「六八年五月は起こらなかった」『狂人の二つの体制』）

「革命、他の革命などありえなかったような革命、何がしかのモデルには少しも似ていない革命。それは政治的である以上に哲学的であり、制度的である以上に社会的であり、現実的である以上に範例的である。この革命は少しも破壊的ではないのに、すべてを破壊する。過去よりもむしろ、革命が成就される現在時そのものを破壊する。それは自らに未来を与えようとはせず、考えられうる未来には極端に関心である。まるで自分が開放しようとする時間がとつとつに通常の時間

規定の彼方にあるかのように。こうしたことが起こったのである。根底的な、こう言ってよければ絶対的な〈非連続性〉の決断が下され、歴史上の二つの時期ではなく、歴史ともはや直接的には歴史に属さない可能性とを切り離したのである。」
(モーリス・ブランショ「運動について」『ブランショ政治論集』)

五月がフランス社会にもたらした時代の断絶

- ・実存主義 (アンガージュマン、知識人)
- ・ド・ゴール主義 (レジスタンス神話)
- ・(教条的な) マルクス主義 (党派)
 - enracinement (根付き) と engagement (社会参加) という表現の失効
 - 存在することと政治的なものの根源的な連関
 - communisme という仮説の (再) 解放 (バデュウ)

五月の肯定的解釈: 「肯定的な堆積」(カストリアディス)

六八年以降、フランス社会はより民主主義的、平等主義的な雰囲気となり、市民のあいだの社会的な連帯意識が強まるなど、五月は政治的・文化的にみて肯定的な結果をもたらした。

- 1) 経済活動の分野: 最低賃金制 (SMIC) の確立、失業に対する社会保障制度の拡充など労働者の環境の改善。
 - 「自主管理の思想」が広まり、平等と連帯にもとづく社会関係の新たな型の模索。
 - 2) 政治的・法的な分野: 異性間、世代間、政治家と市民のあいだの関係のリベラル化。
 - 拡大する女性の社会進出→妊娠中絶の制限解除、労働における男女間平等の原則の承認
 - 差異の権利をめぐる変化→バスクやコルシカなど地域固有の文化の尊重、同性愛者や娼婦、囚人たちなどの少数者による権利要求運動
 - 自然保護や反原発を掲げるエコロジスト運動の隆盛。
- 五月は政治的闘争を社会のあらゆる場面で一般化し、「政治的なもの」への人々の感覚を敏感にした。

五月=文化革命 1980年代、左派ミッテラン政権下で定着する穏当な解釈:

五月=個人の自律の表現としての文化的な社会変容
≠労働者との連帯や反植民地主義的運動といった要素

六八年五月と他者の形象

1) 五月と移民——「われわれはみな外国人だ」

五月=フランス社会において移民の存在がはじめて可視化した出来事
五月を通じて、移民をめぐる議論が国民的議論となったとは言わぬまでも、少なくとも世論のなかに、保守革新双方に外国人の存在が認められ始めた。

2) 五月とユダヤ人——「われわれはみなドイツのユダヤ人だ」

五月の象徴的人物ダニエル・コーン=ベンディット、アラン・クリヴィーヌ、アラン・ガイマール
革命的共産主義者同盟 (LCR) の中核メンバーはほとんどユダヤ人
毛沢東主義の「プロレタリア左派」にはガイマールとピエール・ヴィクトール (ベニー・レヴィ)

ベルナール・クシュネール「国境なき医師団」創設者

アンドレ・グリュックスマン、アラン・フィンケルクロート「新哲学者」

ドイツのユダヤ人という他者の形象

左派：異邦の者、排除された者、周辺にいる者、迫害された者への連帯

右派：フランスの自己同一的な健全さから排除されるべき対象。「ドイツのアナーキスト」「コーン＝ベンディットのファシズムに否！」「コーン＝ベンディットをダッハウ〔強制収容所〕へ」

両親の世代のユダヤ人大虐殺の記憶。1967年6月、第三次中東戦争（六日間戦争）

3. 六八年五月40周年

フランスにおける六八年五月40周年

1) ニコラ・サルコジ大統領候補の発言（2007年4月29日、ベルシーでの投票一週間前の総決起集会にて）

Liquider Mai 68（六八年五月を清算すること）

「この大統領選挙で審判を下す必要がある、六八年五月の遺産を継承すべきか、それとも清算すべきか」。

「五月は知的・道徳的な相対主義を社会に蔓延させた。五月の後継者たちは、善悪の区別などお構いなしで、何でもありという考えを私たちに押し付けてきた」。「私が六八年五月という歴史の頁を刷新する」。「五月の最中に『CRS=SS（機動隊=ナチの親衛隊）』と叫んでいた連中の後継者は、現在、警察に盾突くならず者や破壊屋たちの味方だ」。

→政治の退廃、治安の悪化、社会道徳の後退など、現在のフランスにはびこる諸悪の原因=五月の無秩序さ、その参加者の無責任さ

2) 大量の出版物：2008年1月～、フランスで出版された六八年関係の書籍は40冊ほど。

元学生活動家や教師、ジャーナリストなどの自伝など、当事者による証言や日記風の作品。五月を知らない若い世代にその意義を説く著作。

3) 歴史学的研究の進展

これまで六八年五月は主に社会学や政治学の対象。

歴史実証主義的なアプローチの変化：利用可能な資料の増大。「1968年代」

4) 5月を知らない若い世代の博士論文や研究書

例：ベルナール・ブリヨンの博士論文『六八年の聖職者たち』（Bernard Brillant, *Les clercs de 68*, PUF, 2003）。

68年5月の歴史的文脈

反アメリカ帝国主義、反資本主義（高度経済成長と消費社会）、反ド・ゴール主義（権威主義）

→出口の見えないベトナム戦争に固執するアメリカへの反対、資本の論理とは異なる別の社会の探求、政治的・社会的権威に対する根本的な抵抗

1990年代以降の世界の状況

世界貿易機関（WTO）は自由貿易を促進し、世界中で新自由主義的競争を進展。「九・一一」以降、アメリカ

は国連の決議を無視しながら、あからさまに他国に武力行使し続けており、新たな暴力の連鎖を誘発。世界各国で治安が強化され、外国人をはじめ他者への警戒心が高まり、その過剰な猜疑心は新たな国家主義を増長させている。→反グローバル運動「もうひとつの世界は可能だ」

歓喜の情動

五月の出来事≠個人の無責任な自由の追求から生じた出来事

=他者との平等を志向し、他者と連帯しようとするある種の歓喜。ある種の解放と連帯をともなう情動

4. 68年5月を知らない私がパリの路上で経験したこと

〈主要参考文献〉

『環』 vol.33 (特集・世界史のなかの68年)、藤原書店。

江口幹『パリ六八年五月 叛逆と祝祭の日々』論創社、1998年。

Kristin Ross, *May '68 and its afterlives*, The University of Chicago Presse, 2002.

Alain Badiou, *De quoi Sarkozy est-il le nom ?*, Nouvelles Editions Lignes, 2007.

André Glucksmann et Raphaël Glucksmann, *Mai 68 expliqué à Nicolas Sarkozy*, Denoël, 2008.

Serge Audier, *La pensée anti-68 : Essai sur une restauration intellectuelle*, La Découverte, 2008.

Henri Weber, *Faut-il liquider Mai 68 ? : Essai sur les interprétations des « événements »*, Seuil, 2008.

Yvan Gastaut, *L'immigration et l'opinion en France sous la V^e république*, Seuil, 2000.

Yair Auron, *Les juifs d'extrême gauche en mai 68*, Albin Michel, 1998.